

# Thinking Like an Elephant in Thailand

## －タイでのゾウの知力調査－



富山県高岡市立牧野小学校  
渡辺 昭裕

### ○ 目 次

#### 1 はじめに

- ① 調査の概要
- ② この活動に参加しようと思った理由

#### 2 活動内容について

- ① 活動場所
- ② 主な活動内容
- ③ 象の行動・知能調査
  - A 象の鼻（Trunk）の感覚実験・訓練及び知能調査 I
  - B “ ” II
- ④ 象の行動観察
- ⑤ 象の行動調査のデータ集計、入力
- ⑥ Lecture（講義・講演）
- ⑦ 象の健康調査・健康保持への取組
- ⑧ アースウォッチのメンバーとして教育活動への参加
- ⑨ ゴールデン・トライアングル地域の産業見学

#### 3 児童や教職員に還元できるプログラム

- ① 教職員への報告会
- ② 6年理科「生物の暮らしと環境」の授業
- ③ 6年理科「人と環境」の授業

#### 4 アースウォッチでの体験が学校教育のどのような意味をもつか。



## 1 はじめに

### ① 調査の概要

ア 期 間

2014年7月26日～8月4日

イ プロジェクト名

Thinking Like an Elephant in Thailand

ウ プロジェクト概要

ジョシュア・プロトニク博士及び博士の調査チームと一緒に、ボランティアは象の行動と知性を理解する調査を行う。チャンライ県チャンセンで飼育されている象の身体を傷つけない認識調査を行い、ゾウの行動をより深く理解しようとする。ボランティアは象と身近に接して働き、認識実験の行動データを集め、調査の準備や装置の設置、餌の用意などを手伝うほか、象遣いの日常の仕事を手伝うこともある。さらに、タイの学生向けの教育プログラムにも協力する。

象はすべての生息地で絶滅の危機に瀕している。ゾウが地球上で最も知能の高い動物に数えられることは広く知られているが、それを実証する証拠はほとんどない。象について知れば知るほど、象を保護する必要性を一般の人々に的確に伝えることができる。象の行動について調査することで、研究者は霊長類以外の動物がどのように知能を進化させたかをもっとよく理解できるし、人間と象との争いを緩和する方法を開発することもできる。

エ 調査地

Chiang Rai, Thailand

オ 主任研究者

Dr. Joshua Plotnik / John Roberts

### ② この活動に参加しようと思った理由

ー「感じ、考え、実感できる」環境教育をー

子供たちが身近な環境に「感じ、考え、実感できる」ことが環境教育の根幹であると考えます。楽しく、興味深い自然観察や自然体験がいかにより子供たちの心に響かせるかが環境教育の鍵となる。そのためには、私自身が実際の事象にふれ、「感じ、考え、実感する」場が必要である。

私は、教員生活30年余り、理科学習を通して、身の回りの自然環境に興味をもつ児童を育てたいと考えてきた。そのような児童が大人になる過程で、自分の身の回りの自然環境に触れ、自然を慈しみ、身の周りの人々までも優しい心で接することができるようになると考えたからである。


私は本物の象がどのような行動をするのか等を、自分の目で確かめたいと考えた。自分自身が「感じ、考え、実感」したことを子どもたちに伝えたい。子供たちは「自分もそこに行き、自分の目で見て確かめてみたい」と思うだろう。本物の自然の中に身を置くことで自然環境との共存が必要であることも実感するであろう。自分の目で見て「感じ、考え、実感できる」環境教育の推進者の育成が教育者として私に与えられた使命であると考えた。

## 2 活動内容について

① 活動場所

活動場所は”ゴールデントライアングル”の中の小さな観光地にある。その地域はタイ、ラオス、ミャンマーを流れるメコン川流域にある。

「ANANTARA GOLDEN TRIANGLE ELEPHANT CAMP & RESORT」(リゾートホテル)敷地内の Elephant Camp で暮らす象が観察対象であった。そのホテルを利用する観光客はそれらの象を使い、象遣いや象トレッキングの体験もできる。



活動場所の地図



ANANTARA GOLDEN TRIANGLE ELEPHANT CAMP &amp; RESORT

## ② 主な活動内容

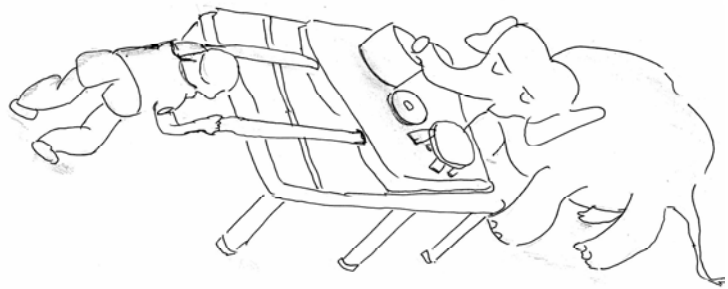
- ・ 象の鼻（以下 **Trunk** と表記）の感覚調査 . . . . . 装置を使い、**Trunk** の感覚の調査、及び記録
- ・ 象の知能調査 . . . . . 装置を使い、餌をどのように見付けるかを調査、及び記録
- ・ 象の行動観察及び集計 . . . . . 3 頭の象をフィールド（柵で囲まれている）に離し、それぞれがどのような行動をするか記録し、それを集計する
- ・ タイの小学生との交流授業 . . . . . 現地の小学生と授業を通しての交流
- ・ タイ語のレッスン . . . . . タイ人の特質、考え方、現地の生活様式等について現地の人から話を聞いたり、質問したりする。
- ・ レクチャー及び討論会 . . . . . 生物学を専攻する大学生の講義を聴き、討論する。
- ・ 現地の生活様式、産業等視察 . . . . . 現地の生活の様子や産業等について見学する。

### ③ 象の行動・知能調査

#### A Trunk の感覚実験・訓練及び知能調査 I

Trunk は、物をつかんだり、水を飲んだり、相手とコミュニケーションを取ったり、臭いをかいだりできる大切な身体部位である。

Trunk の感覚を詳しく調べることは、象の行動を探る上で必要不可欠である。



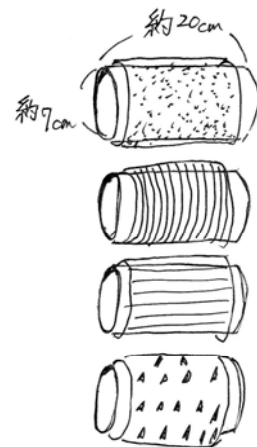
Trunk の感覚実験・訓練及び知能調査の様子

右図のようにバケツの中に餌を入れ、そのバケツに蓋をかぶせたり、蓋を取ったりして餌の獲得方法を調査し、データーを蓄積、解析することで Trunk の感覚や知能を調べる。象の感覚や知能を知ることによって象の行動を理解し、人間との共存を図ろうとするものである。

#### B Trunk の感覚実験・訓練及び知能調査 II

上記の A との関連を図りながら、A より少し高度な実験訓練が成された。素材の違う 4 種類のバトン状の物（タオル、ゴム、ロープ、サンドペーパー）（右図参照）を 5 秒間 Trunk で触れさせる。それから、4 種類のバトンを入れたバケツに入れ、象に選択させる。最初に触れた素材と同じ物を選べば、ご褒美に餌がもらえる。

この訓練を繰り返すことで、象は最初に触れた物を選ぶようになるが、どのような選び方をしたのかが問題となる。最初にどれに触れ、次はどれに触れて正解を出したか等、Trunk の動きは詳細に記録される。1 頭につき 20 回のテストが成され、個体も変えながらデータが蓄積されていく。



Trunk の感覚実験・訓練で使う 4 種類のバトン

自分はこの観察・訓練に疑問を感じ、「象は Trunk の感覚ではなく、色の違いで選択するのではないか」と質問してみた。担当者は次のような答えを返してくれた。「象の視力は弱い。あれだけの距離では色の区別はできないはずである。象は臭いや Trunk の感覚で選択しているはずである」と・・・後日、辞典で調べてみるとやはり象の視力は大変弱いと書いてあった。



Trunk の感覚実験・訓練及び知能調査の様子

自分が抱いた疑問を拙い英語で質問し、担当者も丁寧に答えてくれた経験は貴重で大きな自信となった。疑問が生まれたらその場で解決しようとする強い意識が観



察者には必要であることが実感できた。

#### ④ 象の行動観察

スタッフとペアになり 4組で下記の①②③の観点で象の行動観察を行った。

① Trunk でどのようなコミュニケーションをしているのか (Trunk Behavior)

② 3頭の象がどのような位置関係か (Proximity)

③ 3頭の象が何をしているのか (Body State)

の3点について1分毎に観察し、記録をしていく。それを40分間継続する。

(右図参照)

この調査結果を累積することで、象の行動様式を把握し、人間と象の共存を図るための具体的な方法を探ろうとするものである。



象の行動調査の様子

象の行動観察シート			
Date:	Start Time:	Observer:	
Elephant Names			
1 ( )	2 ( )	3 ( )	
Min	① Trunk Behavior		
1:00 ↓ 2:00	1TT2, 3TM2, 1HB3		
	Elephant	③ Body State	② Proximity
	1	FG	WT
	2	RX	WT
	3	WA	AW
2:00 ↓ 3:00			

#### A Trunk Behavior (Trunk でどのようなコミュニケーションをしているのか)

他の個体を触った時にどの部位を触ったのか記録する。上記の1 TT 2 (1Trunk-Trunk2) は、1 番の象が2 番の Trunk に触れたという意味である。3 TM2 (3Trunk-Mouth2) は、3 番の象が2 番の口に触れたという意味となる。区切られた時間の中で、それぞれの象の Trunk に注目し、記録をしていく。

TT (Trunk-Trunk) 鼻—鼻	TG(Trunk-Genital) 鼻—性器	TH(Trunk-Head) 鼻—頭	TM(Trunk-Mouth) 鼻—口
TB(Trunk-Body) 鼻—体	HB(Head-Body) 頭—体	BB(Body-Body) 体—体	※T TとB Bは順不同

#### B Proximity (3頭の象がどのような位置関係)

それぞれの象の位置関係を記録する。担当者のコールを聞き、3頭の距離を記録する。下記の3つの中から選ぶことになる。上記の例では、1 番と2 番の象は互い Trunk が届く距離にあり、3 番の象は1 番、2 番の象から距離を置いているという意味である。

WT(Within trunk's reach) 鼻が届く接近距離の状態	AW(out of trunk's reach) 鼻が届かない距離の状態	OOV(out of View) 他の個体や草に隠れて見えない。記録不能
---	---	---

### C Body State（3頭の象が何をしているのか）

②と同様、担当者のコールを聞き、それぞれの象が何をしているのかを記録する。上記の例では1番の象は餌を探し、食べている。2番の象はリラックスしている。3番の象は歩いているという意味である。

RX(relaxed) リラックス	FG(foreging) 餌を探し食べている	WA(walking) 歩いている
GR(grooming) グルーミング	NR(not relaxed) リラックスでない	OOV(out of view) 記録不能

- ⑤ 象の行動調査のデータ集計、入力  
記録した結果を次の日に集計、入力を行った。4組が集計した結果を Trunk Behavior, Body state, Proximity の順で担当者が読み上げていく。それをカウントしていく。大きな用紙に記録し、コンピューターに入力していく。

地道な観察であるが、毎日のデータが蓄積され、象の行動様式が少しずつ明らかになり、人間との共存も可能になるのだろうと感じた。



象の行動調査データ集計の様子

### ⑥ Lecture（講義・講演）

スタッフの中には、動物学を専門に学ぶ学生がいる。その学生の専門分野について Lecture を受ける時間が設けられていた。Lecture を助けるための、BBC[Super Smart Animals]は日本の京大霊長類研究所のチンパンジーの紹介や、イルカ、犬、等の知力に優れた動物の能力の紹介の映像が流された。他、3人の学生による Lecture も開かれた。

1回目は「生物多様性」についての内容であった。深海や高山にも生物は多様な進化を遂げて生息していることや種の多様性についての内容であった。

2回目は Sophie Wasserman による「ゾウと他の生物の脳」であった。体の大きさに対して脳の大きさはある程度比例している。しかし、クジラやゾウの脳は大きいだけではなく、



Lecture の様子

その構造や性能に優れた点があるということであった。図が用いられ、他の生物との比較もされ、とても分かりやすかった。

この日は Skype を使って Dr.Joshua Plotnik と話す機会を与えられた。実際に顔を見て話を聞くことができた。専門用語も多く残念ながら質問することはできなかった。

# ⑦ 象の健康調査・健康保持への取組

個々の象の身体特徴を捉え、健康管理をすることが象との共存を考えたときには大切である。個々の象の健康状態を絶えず把握し、的確に対応する体制を整えている。

耳の後ろにある大きな血管を押さえることで脈拍をとる。部位ごとに皮膚や骨の様子を触りながら診ていく。実際に体重を量ることはできないので、肩までの高さを測り、数式にあてはめ、おおよその体重を把握することができる。

まず、胴周りをメジャーで測る。この象(名前: PHUKI)の場合 371 cm であった。これを計算式に当てはめて、体重を求めることができる。

## Elephant Physical Examination

Elephant's Name:	PHUKI	Sex:	MALE	Age:	43
Mahout's Name	No I				
Marking/ Characteristics/ Habit	Ear tear on both ears				
Nails No.				Tush/ Tusk	
Rt. Front.	Lt. Front.	Rt. Hind.	Lt. Hind.	Rt.	Lt.
5	5	4	4	1	1

Date	Evaluation			Measurement		Note
Body Region	Bony	Moderate	Full			
A. Head	0	<input checked="" type="checkbox"/>	0.5	CG (cm)	371cm	
B. Scapular	0	0.5	1	Weight (kg)	3342kg	
C. Thoracic region	0	0.5	1	CF (cm)	132cm	
D. Lumbar vertebrae	0	0.5	1	SH (cm)	249cm	
E. Pelvic bone	0	0.5	1	RR (bpm)	7	
F. Tail	0	<input checked="" type="checkbox"/>	0.5	Pulse (bpm)	28	
Total	5			Temp. (°C)		

象の健康調査カード

体重を求める計算式  $18 \text{ kg} \times \text{CG (胴周り)} - 3336$

PHUKI の場合  $18 \text{ kg} \times 371 - 3336 = 3342 \text{ kg}$



象の健康観察の様子





象の健康観察の様子

# ⑧ アースウォッチのメンバーとして、教育活動への参加

現地の子供たちへの Education Program を作成した。タイに生息する象の実態を知ることができる三択クイズを考えた。スタッフは出題係と解答用紙を持つ係とに別れた。クイズが出題されると子供たちは正解だと思う答えの所に移動できるようにした。

さらに、現地の子供たちへ折り紙で作った象をプレゼントしようとも考えた。自分は折り紙の象を子供たちにプレゼントするため、スタッフに折り方を指導した。スタッフ全員が象の折り紙を作り、細かな細工をする日本伝統の折り紙に感心する声も聞かれた。

教員に引率され、子供たちは Elephant Camp を訪れた。子供たちは我々が考えたクイズに答え、正解した子供たちは体全体で喜びを表現していた。正解者へのご褒美として折り紙の象を受け取った子供も嬉しそうであった。

餌が入ったバケツとそうでないバケツを用意し、象の前に出した時、どちらのバケツの蓋を取るか検証実験を行った。子供たちが実際の活動を通して象がどれだけ知能がある動物なのかを体験するプログラムも用意した。

現地児童との交流を深めることができ、充実した時間を過ごすことができた。



現地の子供たちへの教育活動



⑨ ゴールデン・トライアングル地域の産業見学

現地は、黄金の三角地帯「ゴールデン・トライアングル (Golden Triangle)」(東南アジアのタイ、ミャンマー、ラオスの3国がメコン川で接する山岳地帯)でアフガニスタン・パキスタン・イラン国境付近の黄金の三日月地帯 (Golden Crescent) と並ぶ世界最大の麻薬・覚醒剤密造地帯であった。

各国政府及び国連機関はケシに代わる換金作物としてコーヒーの栽培を奨励している (ドイツンコーヒーなど)。また、陶器づくりや絹織物等で成功している地域もある。最近では治安もよくなり観光客も立ち入れるようになってきている。(ウィキペディアより一部抜粋)

この地域を訪れ、ケシに代わる換金作物や産業を見学した。鋳物や紙、コーヒー豆づくりなど、国を挙げて産業振興に力を入れていることが分かった。ここで働く人々は、バイクに乗り、身なりもしっかりし、生活も安定しているように見えた。

「ケシはアヘンとして使われるから、栽培してはいけない」とどれだけ叫んでもケシの栽培は根絶できない。これまで、ケシ栽培で生計を立てていた人々には、ケシに代わる換金作物や産業に従事してもらう必要がある。さらに、その換金作物の栽培や振興産業で十分に生計が立てられる実感も必要である。そのために、国を挙げた振興産業の発展が必要なのだと実感した。



ゴールデン・トライアングル地域の地図



ゴールデン・トライアングル地域の産業見学

### 3 児童や教職員に還元できるプログラム

#### ① 教職員への報告会

夏季休業中、本校の研修会で、自分が参加したプログラムの報告会を行った。

##### 〈報告会の流れ〉

- |   |           |                |
|---|-----------|----------------|
| A | 本プログラムの目的 |                |
| B | 〃         | 活動場所の紹介        |
| C | 〃         | 活動内容の紹介と体験     |
| D | 〃         | における外国人との交流活動  |
| E | 〃         | における現地児童との交流活動 |

上記の流れでプレゼンテーションソフトを活用しながら報告を行った。

#### A 本プログラムの目的について

アースウォッチという団体があることを知らない教職員がほとんどであった。  
このような団体があり、一般市民にも働きかけながら地球環境を守る取組をしていることに驚きがあった。

#### B 本プログラムの活動場所の紹介について

タイだけでなく、世界様々な所で環境調査が行われていることに驚きがあった。

#### C 本プログラムの活動内容の紹介と体験について

普段調査できない象の行動や知能調査の具体的な方法に感心し、興味をもったようだ。

#### D 本プログラムにおける外国人との交流活動

同じ目的をもった様々な人種の人たちで調査、研究することのすばらしさを意識したようだ。

#### E 本プログラムにおける現地児童との交流活動について

アースウォッチが現地児童の教育プログラムまで推進していることに驚きがあった。



教職員への報告会の様子

#### 〈報告会后、教職員の感想〉

- ・ 動物園の象しか見たことがなかったので、象のかわいい仕草がたくさん見ることができ、ますます象が好きになった。(M 教諭)
- ・ 象は知能が高く、賢い動物であることが再認識できました。また、行動も穏やかだといくことも分かりました。象が生息するタイで象の行動や知能に関する調査、研究が行われ、様々な国の人々が関わっていることに興味を抱くことができた。(N 教諭)
- ・ 象の Trunk の実験、観察がとても興味深かった。(T 教諭)
- ・ 象の行動観察、実験という活動を通して様々な国の人々と交流できること、母語でない言葉を使い、動作も交え自分の思いを伝える体験をすることがすばらしいと感じた。(A 教諭)
- ・ 先生ご自身が体験されたことなので、楽しさや苦勞がすごくよく伝わった。今後、子供たちにも話をされると思うが、先生の思いがすごく伝わると思う。(M 教諭)
- ・ 自分の知らない所で同じ志をもった者が集まり、このような取り組みが国籍を超えて行われていることに感動した。(Y 職員)
- ・ 多忙な人間社会の営みから離れ、象の行動観察を通して外国人とコミュニケーションを取りながら研修する姿に感動した。このような活動が、これからの地球環境をよりよくしていくのだと感じた。(S 職員)
- ・ 未知の新たな世界にチャレンジする姿に感銘を受けた。写真や映像からその状況を楽しみ、充実した様子が伝わってきた。一つの窓口から新しい世界に目を向けるとさらに世界が広がり、つながってどんどんネットワークが広がっていくのだと感じた。自分も現実逃避でなく、自己成長させるために新しいことにチャレンジしようと思った。花王がスポンサーだということを聞いた。このような場を教員に与えるということがとてもよい社会貢献だと思う。(I 教諭)

## ② 6年理科「生物のくらしと環境」の授業

自分自身がこのプログラムに参加し、見聞、体験したことを6年生の理科「生物のくらしと環境」に生かそうと考え、授業実践を行った。

### ア 学習のねらい

動物や植物の生活を観察したり、資料を活用したりして調べ、生物と環境との関わりについての自分の考えをもつことができるようにする。

### イ 学習の流れ

- 第1次・・・生物と空気との関わり
- 第2次・・・生物と水との関わり
- 第3次・・・食べ物を通した生物同士の関係
- 第4次・・・生物のくらしと環境



授業風景

### ウ 授業の実際

第1次、第2次では、生物が空気、水とどのような関わり方をして生きているの



かについて学校園のジャガイモやハウセンカ等の観察を通して調べた。図書室やコンピュータ室で資料を捜し、レポートとして提出した児童もいた。

第3次では、肉食獣と草食獣の関係、鳥と昆虫との関係等を学び、食物連鎖についても学んだ。

第4次「生物の暮らしと環境」において、私がこのプログラムで体験したことや学んだことを紹介し、子供たちに環境問題についても考えさせる場を設けようと考えた。



授業風景

象の行動調査方法や知能調査の様子を映像や写真を通して理解した児童は、より象の行動に興味をもったようである。具体的な調査方法を紹介することで、「なぜ、そんな調査が必要なの？」という疑問も生まれ自然環境を守ろうとする人々の取り組みに気付く姿も見られた。

〈実際の授業の様子（Tは教師の発問、Cは児童の発言）〉

T: 画面を見て、アジア象とアフリカ象の違いを見付けて下さい。

C: アジア象の方が耳や鼻体が小さい。体全体も小さいようだ。

T: アジア象はどのような場所で生活しているのかを見ましょう。

C: アフリカ象を大草原だけどアジア象は周りに木が生えているところにいるんだ。

T: 次に先生が現地で行った象の知能や行動調査を紹介します。

(途中略)

C: 象はとっても頭がいいね。とってもかわいいなあ。

C: 毎日、象の行動調査をしていて大変だね。

C: どうしてこんな調査をしなければいけないのかな？

T: 野生の象が今まで生活していた場所に人間が住むようになってしまったのです。象と人間とのどのように共に暮らすことができるか、象の行動調査を通して見付けようとしているんだよ。

・ぞうに いろいろな習性があってびっくりした  
・ぞうは とてもかしくて人間みたいですごいなと思いました。  
・ぞうに乗ってみたいと思った。  
・ぞうは、とても頭がいいのでこれからたくさん勉強して、かんきょう問題も直して一緒にくらせるようになったらいいなと思った。

T子の授業後の感想

ぼくはゾウの木重類が何木重類があるのはしていた  
 けど何がちがうかはしらなかったなのでこの機会  
 にいろいろなことをしたのでよかったです。  
ゾウについて同じことを何回もしみちにくり返し  
てやることで色々なことがわかり、そしてゾウと仲良  
くなることで、何かわかることがあるのだと思いました。  
これからは人間と動物とのつながりを見直す  
ことも大切だと思いました。

H 男の授業後の感想

### ③ 6年理科「人と環境」の授業

環境教育の一環として、象と人間との共存の在り方や象が生息する自然環境を守るために自分ができそうなことを6年生なりに考える場を設けた。

#### ア 学習のねらい

人は、自然環境を守るためにどのような取組をしてきたのかを知り、地球環境の保全のためにこれから一人一人ができることは何かを考えることができる。



#### イ 学習の流れ

第1次・・・わたしたちと空気

第2次・・・わたしたちと水

第3次・・・わたしたちと植物

第4次・・・自然環境を守るために

#### ウ 授業の実際

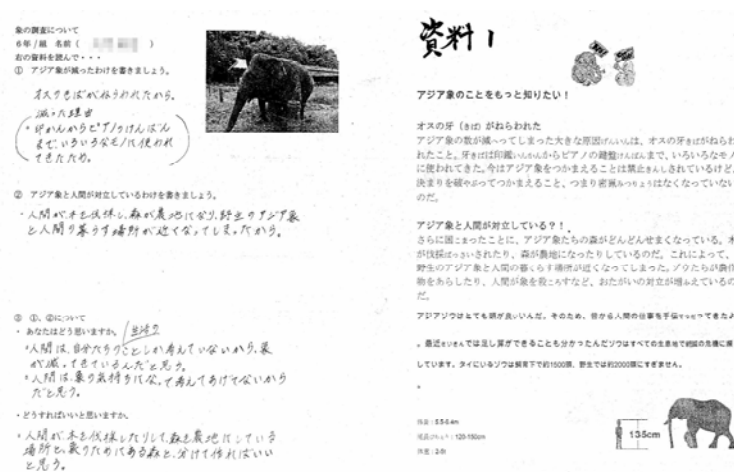
第1次～第3次までは空気、水、植物が人間とどのように関わっているのかについて学習した。

第4次の最初には「アジア象の知能調査、行動調査」を行う意義を写真や動画を介して話した。次に、アジア象の生息地域の現状、そこで生活する人間との関わり等について資



授業風景

アジア象の生息域の減少を知った児童は「アジア象を守りたい」という考えと「そこで暮らす人々の生活」との関わりについて悩み、どうすることがアジア象や人間にとってよい方法となるのかを真剣に考える姿が見られ



〈児童が考えた象と人間との共存の在り方や象が生息する自然環境を守る方法〉

- アジア象と人間とが対立していることについて
- ・ アジア象はとても頭がよく、人間の手伝いもしていたのに、対立していることはとても残念だ。(H 男)
  - ・ 人間は自分のことしか考えていない。もっと、象のことも考えてあげたい。(F 子)
  - ・ アジア象のすみかがだんだん少なくなっていることを初めて知った。(Y 男)
  - ・ 木を伐採し、アジア象の暮らす森を狭くした人間が悪いと思う。(K 子)
- アジア象と人間が仲良くなるための方法
- ・ 木を植え、象が住みやすい環境を整えてやる所と、人間が農地にする所をしっかりと区別してやるとよいと思う。(O 男)
  - ・ アジア象は頭がよいので、人間と仲良く暮らすことができると思う。(S 子)
  - ・ アジア象の保護区域をいろんな所に作ればいいと思う。(S 男)
  - ・ 木を伐採するには、必ず何本必要かを報告させ、目的のない木の伐採は認めないようにする。(F 子)
  - ・ 人間と象との交流を増やせばいいと思う。(D 男)

研究者たちの活動は、環境調査や動物を対象にした検証実験である。





Trunk の感覚実験・訓練及び知能調査、象の行動観察を繰り返してデータを集約する等地味な活動である。

環境破壊で象の生存域が縮小され人間との共存が図られる中、これらの取組は必要不可欠であることを学んだ。毎日の研究を積み重ねて、明らかになることは多くあるはずである。真理を求め、粘り強く取り組む研究者たちの心構えや思いを子供たちにも伝えていきたい。

子供たちには、世界の自然事物・現象に目を向け、地球規模で環境問題を考えていく姿勢が必要となる。自分が目にした現地の自然環境や環境破壊の現状についても子供たちに伝え、地球の自然環境を守ろうとする子供の育成も図りたい。

生活様式や考え方も全く違うタイの学生、アメリカの小学校の先生、大学院生、現地の人々たちとの出会いも貴重な体験となった。習字で名前を書いたり、相撲を教えたり、折り紙で象を作ったり、日本の文化を紹介する場を生かし、交流を深めることもできた。様々な機会を生かし、積極的に外国の人々との交流を図ろうとする姿勢も伝えていきたい。



これまで、外国で10日間も過ごす経験など全くなく、考えもしなかったことを体験できた。象の生態にも十分に関わることができ、地球上に生息する生物を新たな視点で見直すきっかけにもなった。このことは、自分自身一生の宝物となるだろう。

このような素晴らしい機会を与えてくださった花王株式会社の皆様、アースウォッチ・ジャパンの皆様には心から感謝申し上げたい。さらに、タイで出会った研究者たちや学生、派遣を後押しくださった教育委員会、校長先生はじめ教職員の皆様、そして協力をしていただいた全ての方々にお礼を申し上げ報告とさせて頂きたい。



